はくさん

第5巻 第2号

白峰村かんこ踊

「河内(こうち)の奥は朝寒いとこじゃ……」とはじまるかんこ踊は，石川郡白峰村にいまに伝わる古雅な民俗芸能です。このかんこ踊のかんこという名称の意味については，神迎，カンコ（腰に下げる蚊よけの火）など，さまざまな解釈がなされていますが，踊りの際に用いられる羯鼓(カンコ)から来歴しているのが本当のようです。

村人のいいつたえによれば，かんこ踊は，泰澄の白山開山と関連し，泰澄上人が白山より下山された姿を見て村人が踊ったのがはじまりとされています。

かんこ踊には，座敷踊，庭踊，変装踊などの多様な踊り方があり，踊りの際につける衣装もそれぞれ異なります。現在は7月17日の「白山まつり」や9月の祭礼の時に公開され，その優雅な舞いは，広く人々の心をとらえてはなしません。　（高桑　守）

白山スーパー林道の開通によせて

石　田　宗　治

白山スーパー林道が完成し，最初の供用期間が終った。この間の利用車台数は9万台余，1日平均1,240台に達し，特に利用の多い日曜祭日には、主要地方道岩間一瀬戸野線の渋滞が数キロメートルに及び，これは事前の予想をはるかに上廻るものであった。時期が丁度紅葉の季節に当り，しかも今年は好天に恵まれたことに加えて，開通当初の物珍らしさも手伝っていよう。10年間にわたる工事期間中，自然保護に関し多くの論議を生み，話題を提供したことも利いているのかも知れない。

白山をはさんで南と北は，その急峻な地形と豪雪によって隔てられながらも，交流の歴史があり，また尾添川に沿った鉄道計画の挫折はまだ記憶に新しい。南の壁を破ることは，北側にとっては多年の課題であった。

蛇谷周辺は，その原始性の高さでは，わが国有数の白山国立公園の中でも特に優れた所として知られてはいたが，中宮温泉から上流の美しい渓谷は，多くの人の目に触れることなく，ひっそりと息づいて来た。ここを通る車道は，「白山の秘境を切断して走るもので，その付近全体の自然保護はもちろん，さらに隣接する18,000ヘクタールの特別保護区をいかに管理するかについて十分検討せねばならない」（白山学術調査団編　白山の自然，序文より）として，自然をできるだけ残そうと，さまざまな工夫がこらされた。そしてこのことは，開通したから終った，と言うものではない。

錦繡に彩られた渓谷の景観は，すばらしいの一語に尽きるし，新緑への期待を誘う。ここを訪れることのできた多くの人々が，この中から，自然の豊かさ，貴さ，厳しさを感じとり，自然保護とは何か？への心を向けてほしい。白山自然保護センターの来訪者数も激増しているが，きっかけを摑んだ人が，さらに前進できるよう，展示や解説の充実を図っていきたい。

供用開始後，空かんやごみの投棄が見られるのは残念だが，これは利用者のモラルの問題だけに帰するわけにはいかないだろう。法面の崩落，帰化植物の侵入，植物の盗掘や踏み荒し，樹木の枯損等について厳しい指摘がある。これらを謙虚に受け止めていかなければならないのは当然であり，さらに公園利用の態様が大きく変ることも含めて，これらに伴う今後の変化を長期的に見守り，適切な対策を構じていきたい。

白山に関りを持たれる多くの方々の，ご叱正も含めて，ご鞭韃とご協力をお願いしたい。

〈石川県環境部長〉

白山スーパー林道の開通と自然保護

千村勝哉

昔から富士山，立山と並んで三名山の一つとして広く親しまれて来た白山の山系北部に，去る8月26日，「白山スーパー林道」が有料道路として供用開始された。

石川県尾口村尾添と岐阜県白川村荻町を結ぶこの道路は，昭和42年，森林開発公団によって着工されて以来，開削工事が続けられたのち，昭和51年4月，石川県林業公社が管理運営を引継ぎ，現在まで10年の歳月と77億円の巨費を投じて作られた道路である。総延長33㎞，岐阜県側一部が一車線の他は6.5m幅の二車線からなり，標高1,480mの県境部を始め14か所の隧道を含む舗装道路である。このうち，21㎞が白山国立公園内を通過している。

沿線途中には石川県白山自然保護センター，野猿広場，古くからの湯治場として知られる中宮温泉が存在し，更には昔から里人さえ近づけさせなかった急峻な蛇谷渓谷をくねり登り，再び下って合掌村として有名な庄川流域の白川村に至る。周辺はブナ林や亜高山帯林をなし，石川県側県境付近からは白山頂上が遠望される。

供用開始から冬期閉鎖された11月6日までの通行量は約91,000台で，乗用車86,000台，マイクロバス2,700台，貨物車63台という内訳であった。開通前予想より3.6倍という通行量だから関係者は予想外の誤算に驚かされた訳である。名は林道というものの，秘境蛇谷渓谷や白山展望が車で容易に果されるとあって利用者の殆んどは観光行楽客であったようだ。

もともとこの道路が作られる機縁はずっと以前にあった。大正末期頃，ほぼこの路線沿に石川県側から岐阜や名古屋方面へ抜ける鉄道線として構想されたことがあったのである。これが，事情で途絶えたあとと山麓山村がそれに寄せる願望は大きく，結果的にはスーパー林道という形で表現された訳である。しかし，当該地域はブナ林に被われた地形急峻な山岳渓谷を通過することで自然保護との兼ね合い上，以前から種々論議を呼んだことは衆知となっている。

論議にかかわった代表的な二つの立場は，次第に過疎化し，取残される山麓過疎山村を

料金所からの車の列（自然保護センター前にて）

何とか打開しようとする立場と，白山は高山としては本州最西端にあり，ブナ林や西限となる高山植物が多く，動物の生息密度も高いという特殊な山であることから自然保護を重視すべきだという立場である。

道というのは，もともと村と村を結ぶ簡易な徒歩道であったのが科学文明や技術が進歩するにつれ，大規模化，短絡化が進み，高度も平地から次第に山岳部へも作られるようになり，今やその気ならばどんな高山の頂上でも敷設可能な道路技術を持つに至った。その意味で白山スーパー林道はそのことを証明する一つの例と言えよう。しかし，自然保護の認識を強く強いられるほどの背景を持つ時代になってもなお，高度技術に任せてどこもかしこも分別なく道路が作られていく事は，重大な問題で，今後はより一層その対象地域の厳格な是非の振り分けが行われるべきであろう。でないと私達が目ざす豊かで質の良い生活が侵蝕されるに至るからである。例えば，日常の生活域では道は一本でも多い方が良いとされても，普段の生活から離れ，保養や登山，観光などの対象となる場所では先ずその場所そのものの保持が先決とされるべきであり，国立公園などはこれに該当する訳である。むろん，日本の国立公園の場合はアメリカなどのそれと違って，公園内には民有地が少なくなく，農林水産業との併用地が多いのでこの辺の調整は欠かせないが。

混雑する林道フクベ大滝付近

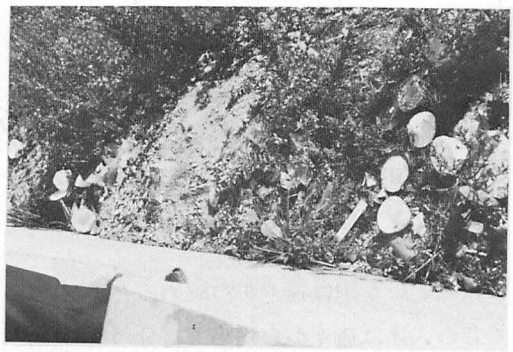
当林道の場合，過疎山村振興を図る為の大きな柱ということで作られた訳であるが，今後その目ざした目標とどのように関連させ，地域社会に反映させるのか，現段階では明言し難い。周辺の自然環境にとってはかなり問題が残されて来ている。例えば，開通後の通行客は観光客が殆んどであったが，車利用による行楽は開放気分が強くなるらしく，通行客のマナーは相当にひどい状況であった。管理及び利用側の不慣れもあっただろうが，展望箇所でのゴミ放棄は絶えることがなかったし，林間での脱糞も少なくなく，シャクナゲなど植物の盗掘もかなりの数に上った。ゲートで渡されるチラシもあまり読まれていないか無視されているようだ。ゴミ残飯放棄や脱糞はその地区に棲む動物の生態にも大きな影響を及ぼす原因となるのでゆるがせに出来ないものである。更に，開削工事中の捨土による長大な裸地法面，荒廃された植生や枯損木，或いは捨土による蛇谷の高床化など，トンネル工法を増やしたり，土留め工，法面緑化工を施すなどそれなりの努力はなされて来たが，結果的には周辺の景観は一変してしまった。しかし，いずれにしてもこの状態が放置されることは許されることではなく，出来るだけ早く，かつ着実な方法で，一つの事業として，本来の蛇谷渓谷への回復が図られるべきである。今，石川県白山自然保護センターでは，今後，林道そのものが周辺の自然環境に対してどのような影響なり変化を与え

るかを把握する為に，植物，動物，大気等の分野で定点観測が始められており，こうしたことが今後の適切な回復，運営管理に大いに活かされるべきであろう。

このように造成され，運営されつつある当林道を見るにつけ，自然保護の面から言えば，場所柄にしろ，工法的にしろ，当初からかなりの無理があった訳で，特に自然環境や景観が優れた国立公園などにおける同種行為に対しての大きな示唆を今後に与えてくれたと言える。

最近よく言われることに，経済成長率が仮に年々6％の場合，10年後には石油使用量はほぼ2倍にもなるとのことであるが，地上に作られる人工物や自然改変もそんな調子で永遠に現出されるのだろうか。しかし，国立公園のような場所はそういった比率とは無関係であるべきであり，その価値から鑑みて永久不変なものとして維持されなければならない。過去の歴史を振り返って見ても，それは，日本人の心なり文化，つまりは国を成り立たせているものの拠り所の絶頂に位置する一つの核，別の言い方をすれば，動乱期であろうがなかろうが常に人々のうしろから無言で励まし，支え，大きく包んでくれたもの，また

ごみを片付ける公社職員



林道沿線に捨てられたごみ

限りない高みに引き上げてくれたものではなかったか。このような趣旨も含まれ，自然の内容がより優れた白山も国家的見地から国立公園として指定されたものであるが，しかしそのような見地とは別に白山の場合でも古い昔から地元山村にとっては，白山とは切っても切れない深いかかわりのもとでの生活や歴史があり，更には公園内には地元所有地も沢山あって地元山村抜きでは公園としても成り立たない面がある。

このようなことから，今後，全国の皆さんに広く親しまれ，愛されるべき山と，地元山村が望む山との間の自然保護にかかわる両立場からの齟齬（そご）を解消するすべを得なければならないが，このような意味からも白山スーパー林道は一つの大きなテーマが残されていると言えよう。

〈白山国立公園管理員事務所〉

白山の民話　(8)

どうして加賀の白山になったか

石　野　春　夫

白山という山は遠くから眺めると美しい山で昔の人達は遠くから眺めて自分の所の山だと思っていました。しかし白山はとても大きな山で加賀と越前と飛騨の三国にまたがっていますが，飛騨の国の人々はあまり近すぎたのと，周りに高い山が沢山あるので白山の美しさにあまりみとれることはありませんでした。しかし，そのふもとにあたる美濃の国の人々は加賀や越前の人達と同じように神々しい美しい山を眺めて暮していたのでした。そんな訳でそれぞれの国の人々は，あの美しい山，白山は自分達の国の山だと思っていたのです。だから越前の人達は越前の山だと言い，美濃の人達は美濃の山だと言って白山の取り合いが始まってそれが幾百年もの永い間続いて来たのです。当然加賀の国の人々も加賀の白山だと言って争っていたのです。

むかし，むかし，泰澄大師が白山をお開きになった頃は交通も不便でこれら三国の人達は自分の国の山だと思い込んでいたのでしょうが，人間の数も増え，交通もさかんになり，白山へ登る人が沢山になって来たころから，それぞれの国の人達の間で白山をめぐって，ケンカが絶えず起るようになったということです。

加賀の殿様，前田候も何とかしてこの白山を加賀一国のものにしたいと考えていたそうですが，なかなかよい智恵が浮かびません。何代目の殿様のときか判りませんが，うまいことを思いつきました。

殿様が目をつけたのは隣の国，越中富山の薬売りと越中の小原節だったのです。

越中富山の薬売りは日本中津々浦々迄も足をのばして有名な反魂丹を売って歩いていました。

それも沢山の行商人が一年に一回は必ずといってよい程出かけて行って富山の反魂丹の名を天下にひびかせていたのですからこの薬売りの宣伝力を利用したらどうだろうかということになったのです。

もう一つ越中小原節はどんな小さな村でも盆踊りにはうたわれていたのと，薬売り達が旅先でお国自慢にうたうことが多いのでこのうたを利用しようということになったということです。

そこで 越中では立山　加賀では白山
駿河の富士山　さんごく一だよ

という歌の文句を作って踊りの時などにうたわせました。うたの文句もよいし越中人の自慢の立山は入っているし，またたく間に沢山の人がこのうたをうたうようになりました。

富山の薬売り達もお国自慢のうたなので喜んで行く先々でうたって歩きました。こうして何年かたつうちに越中小原節のむづかしいふしまわしは憶えられなくてもこの

越中で立山　加賀では白山
　　駿河の富士山　さんごく一だよ

という，うたの文句だけは沢山の人が憶えこ

んでしまうということになったのです。

薬売り達が旅先で泊るのは木賃宿です。イロリを囲みながら一しょに泊った人達の話はいつの間にかお国自慢になるのが常でした。たまたま白山のことになると「越前の山だ」「いや加賀の山だ」「いや美濃の山だ」とはてしない口論になるのでしたが，こんなとき，薬売りは「あんたら越中小原節を知っているかの」と問うのです。知っている人も知らない人もいます。たまたま知っている人でもいると，「そんなら一つうたってくだされ」と注文をつけるのです。自慢ののどを聞かしたい人などは喜んでうたい出すのです。

きたーるー　はるーかぜ　こーりがーとーけーる　うれーしやー気ままに　おわらはひーらく　うめー

キタサノサー　ドッコイサノサー

越中で立山　加賀では白山

するがの　ふじさん　さんごくーだよ

キタサノサー　ドッコイサッサ

うたい終ると，「今，お前さんも越中で立山加賀では白山と言うたではないか，白山はやっぱり加賀のもんだ」とやるので今まで「越前のものだ」「美濃のものだ」と言っていた人も返す言葉が無くなってしまい，「越中の薬売りが言うんだから仕方がなかろう」とあきらめてしまうということになったのです。そんなことが何年も何年も続いて日本中の人が白山は加賀のものだと思うようになったということです。　〈石川郡鶴来町〉

（イラスト　石川太郎）

幕末白山麓の人口と稗の貯蔵

千　葉　徳　爾

先日，岐阜県歴史資料館所蔵の高山代官所文書を閲覧して，近世末期，今から約120年前の白山麓の人口と当時の生活をうかがうことの出来る記録をみましたので，御紹介しておきましょう。これは「組外御証文留」という留書の中にあり，表題は「越前国幷越前加賀白山麓村々貯穀之儀ニ付取斗方伺書」となっています。注意されるのは，今の手取川流域上流の白峰・尾口の村域が，宝暦ころ(18世紀中期）まで越前分とされていた名残が，国名を明示せず「越前加賀白山麓」と記されていることでしょう。

内容は，嘉永3（1850）年の11月に，当時の飛騨郡代小野朝右衛門が勘定奉行に提出した行政処置の伺書です。漢文でわずらわしいので，ここでは大体の意味を記すこととします。それは天明の飢饉以来穀物貯蔵がこの地方に行われて来ましたが，その量は僅かなもので，非常用としてはとうてい足りませんでした。そこで，天保14（1843）年に代官藤田豊之進が村々の者にさとして承知させ（天保5～8年不作がつづいた—筆者註)，この年から毎年穀物を出させ，凶作の年にはその貯えを代官の取計いによって，村々に下げ与え，これは勘定所へ届けさえすればよいという現地の裁量で処理する許しを得ました。そこで出穀高が次第にふえましたので，各村は組合又は単独で土蔵を建て，籾・麦・銭などを雑穀に換算しますと，稗として10,200名以上となっています。住民惣人数は約38,500人ですが，その半数は身代もあって援助は必要ありません。この人数を引いた残り約19,200人ですが，そのうち15才以下60才以上の男女幼少年及び老人を，全体のおよそ10分の6と見積り，その残を労働人口とみなして，全体で約3ヵ月間の食糧と致して貯えてありました。〔ところが安政5（1858）年に北飛騨地震（M.6.9）がありましたが，貯穀は凶年用ということで被災者に代官が勝手に払下げを許可できませんでした。これでは困りますので〕，どうか凶作ばかりでなく，地震・火災など非常災害のときは直ちに伺わないで代官が臨機に下付することが出来ますよう願いたいと存じます。ざっと以上のようなことでした。

これには，すぐ後に，「書面の通り取計らってよろしい」という12月づけの紙がついて，勘定奉行所の承認印があります。昔はこの承認がないため出先の代官の一存ではきめかね，江戸に伺うのが長びいて住民が苦しんだものです。それを見兼ねて自分の考で処理した代官は多くは免職されたばかりか，処刑された人もありました。甘藷を導入普及させた名高い石見の芋代官と呼ばれた井戸平左衛門などもそういう1人です。この伺書が11月で1ヵ月後に直ぐ認められたのも，これから冬

に向う季節だからのようです。

さて，その後に次のような計算表がついています。これはそのままのせておきましょう。ただし，漢字の数字は読みにくいので，洋数字に改めました。横書にしたので，最後が「日数右同断」とあるのは，上の行の日数のことです。（　）内は理解しやすくするために，私がつけた部分で原文にはありません。

この表の中で注意することを2，3申します。もともとが役人のすることで帳面だけ合せておくための形式にすぎない，といってしまえばそれまでですが，この山間部で稗が貯穀の中核になっているように思われますが，実は籾，つまり脱穀したままの米が量としてはもっとも多いということが注目してよいことでしょう。これは代官所で積立てさせたものですから，或いは年貢米をそのまま転用したのかもしれませんが，それにしても，この出作り焼畑が卓越すると信じられてきた土地で，米が貯穀の重点になっている点は注目してよいでしょう。これにくらべると麦はいかにも少なく，もともと麦作の少い北陸の中でも，積雪の多い山間の性格がよくわかります。そのほか，稗3石を銭100文に換算して2貫文以上の金銭が備えられています。この山中でも幕末ともなれば，貨幣の利用がどうしても必要となって来た様子を示すものでしょう。

こうして，実際の稗の貯穀は2350石前後ですが，山間らしく稗換算で約1万石以上の備蓄食糧があったわけでした。そうして，それで養われる対象としての人口が，白山麓として大野の盆地側を合せると4万人近くもあったわけです。これから先は多少推定になりますが，代官所の見積りでは，この人口のうち約半数が「身元ヶ成之もの」，いちおう資産があって凶作でも1年間は喰いつなげられるというわけです。これは天明や天保の飢饉の経過を体験しての推定でしょうが，それでも全人口の半分は飢えるわけですから，平地の一般農村にくらべれば甚だしい窮乏状態といえるでしょう。その次の数字は飢えると予想される人数のうち，7,706人を15才以上60才以下とみつもっているので，全体の10分の4であろうとみています。これに対しては稗1日8合を給するというのです。これは重要な労力源であり，生産年令ですから当然保護せねばならないわけで，籾に換算すると1日米4合，白米で2合程度になるわけです。歩留りを5分とみるわけです。それを95日間確保すれば，大体冬の何もない期間がすごせて春の山菜などのとれる季節になるとみこんでいるわけでしょう。これに対して，15才以下の幼少年と60才以上の老人とを合せておよそ10分の6，11,558人とみつもったわけです。これは非生産年令ですから，平均して食糧の量も半分にみつもっています。これはちょっと少ない割当のようですが，当時の支配者の目算はこんなところにあったわけです。このとき，現在にくらべて幼少年および老人の人数が比較的多いような感じがするのですが，それは真宗地帯であって間引・堕胎が稀であったことも関係するのかもしれません。この点も考えてみるべき問題ではなかろうかと存じます。とにかく当時の白山麓の住民生活の1面のきびしさとそれに対応する政策の有様がうかがえる1史料でしょう。

「下 ケ 札」の 内 容 表

（本　　文）	（備　　考）
1.　稗2,346石5斗8升4合2才	
1.　稗7,825石4升8合8夕	
此籾3,912石5斗2升4合4夕	但籾1石ニ付稗2石ニ代ル
1.　稗15石9斗8升	
此麦7石9斗9升	
1.　稗71石9斗2合5夕	但麦1石ニ付稗2石ニ代ル
合稗10,259石5斗1升1合7夕2才	今年相場ニ付但96文100文替稗3石ノ積
人数38,527人	
内人数19,263人	去酉年（1849）人数高
残人数19,264人	身元ヶ成之もの除く
7,706人	15才以上60才以下男几4分之積
此稗5,856石5斗6升	是ハ1日稗8合宛日数95日分
内	
11,558人	15才以下60才以上男並女之分几6分之積
此稗4,392石4升	是ハ1日稗4合宛日数右同断
（稗計10,248石6斗	（現在高に対する使用予定計画）
剩余10石9斗1升1合7夕2才）	

（　）内は筆者の挿入分

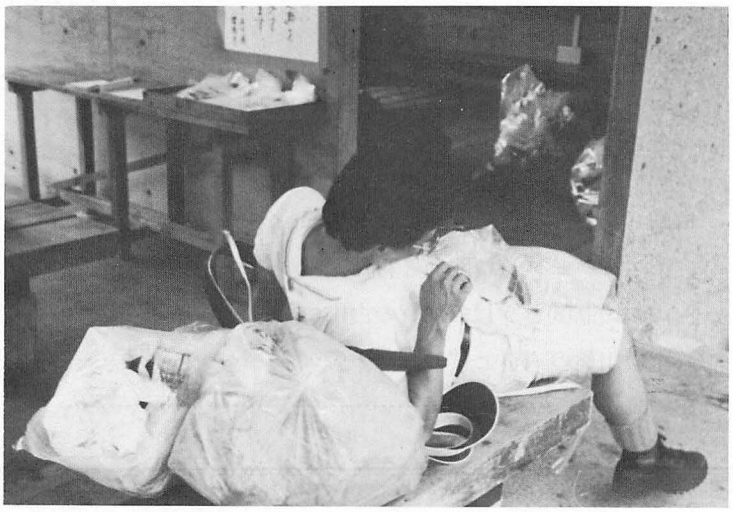
〈筑波大学教授〉

山日記

今年は何事もなく，登山シーズンが終った。
春の白山は明るく輝き，我らに希望と喜びを与えてくれた。
夏の白山は活気に満ち，我らに生きる喜びと働らく楽しみを与えてくれた。
その白山も今は色あせ，半年間の眠りに入ろうとしている。
冬の白山は白いネットで身を隠し，我らを拒み寄せつけない。
白山で本格的にゴミ持ち帰り運動を始めてから，まる4年になる。
今年は市ノ瀬，別当出合，甚之助ヒュッテ，室堂のクズカゴ全部を撤収し，登山者1人1人にビニール袋を手渡し，登山指導，ゴミ持ち帰りを呼びかけた。
結果は大成功だった。
登山者の約8割が手に持ったり，リュックにさげて持ち帰って行った。
来年は100パーセントのゴミ持ち帰りを目指し，努力したい。
白山がきれいになる事は，とっても気持ちのいいものだ。
今登山者に望みたい事は，

◎　無謀登山はしない。
◎　ゴミはかならず持ち帰る。
◎　動，植物，土石等の採取，捕獲はしない。

――我々1人1人の手で白山の自然を守ろう。――



ごみを背負って下山　アーア重たいなー

〈自然保護課〉

たより

白山スーパー林道が8月の末に開通して，いままで静かだった山奥の温泉や，登山者しか入ったことのない蛇谷の奥へ沢山の人々が来るようになりました。

10月の紅葉の最盛期の土日などは，料金所から金沢の方へ20km以上もの車の列ができたほどで，料金所の手前にある自然保護センターも，くたびれ果て休みに来る人，トイレを借りに来る人などで終日ごったがえし，スーパー林道の観光センターのようでした。

それと共に，センター周辺はもちろん，林道沿線にゴミを捨る人が増え，マイカー族のマナーの悪さを再認識しました。

また土日には長い車の列ができるために，定期バスが定刻運転できなくなり，センター職員の通勤を始め温泉関係者，周辺村落の人々の足をうばってしまい，来シーズンに備え，早急な対策が望まれます。

林道も閉鎖され，旅館も雪囲をして皆下山した中宮温泉付近は，たまに落葉が風に舞うだけで，日陰に消え残っている初雪の名残りが，よけいに寒さを感じさせ，あの混雑も夢のようです。

ことしは冬の訪れがおそいようで，いつもなら10月の始めには白くなる白山も11月になってやっと初雪を迎えたようで，できたばかりの一里野スキー場などでは，早く雪が降ることを願っているのですが，秋の間，充分に木の実を食べることのできなかった白山の動物達にとって，冬の訪れがおそいということは，厳しい冬を生きぬくのに都合が良いことなのかもしれません。

目　　次

白峰村かんこ踊……高桑　守…1
白山スーパー林道の開通によせて……石田　宗治…2
白山スーパー林道の開通と自然保護……千村　勝哉…3
白山の民話(8)どうして加賀の白山になったか……石野　春夫…6
幕末白山麓の人口と稗の貯蔵……千葉　徳爾…8
山　日　記 ……自然保護課…11

はくさん　第5巻　第2号

発行日　1977年11月20日
発行所　石川県白山自然保護センター
石川県吉野谷村市原
印刷所　株式会社　橋本確文堂